明治廿六年十二月九日發兌

女學雜誌

第三百五十九號

女學雜誌社

WASON
HQ
1154
J74+
Acc. 1893
no. 359

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百五十九號目録

社説
やさしき情け（上）
（一）ともに忍びがたき風情あり
（二）事物おほよそ死したるはあらず

交詢
大丈夫の秋のくれにつきて（知美小史）
右へ答（しのぶ）

理學
地熱（けい子）

論説
女子教育と武道（星野愼之輔）
（一）女子武道教育の贊否論者に付て

史傳
鷹山公閨房の雛あそび
婦人のデリケシーは沈勇なり
油斷大敵

雜録
紅葉、今昔ものがたり
上　酒を煖ためて紅葉を燒く
下　錦衣を以て土と人とを温たむ
本邦女醫の由來及其前途
第一　女子が醫學に於ける適否
第二　女醫の必要

書架
岡山孤兒院未曾有困難の記事
方今米國婦女子の大勢
女子の郡部會議員
共同飮食クラブ
米國婦女子の過學
日本婚姻法詳解
藤原氏の盛時
日本男女兩性の比較
日本の結婚と離婚
マグダーレンのマリアの墓
日本美人の理想

兒籃
いわひ歌
第六曲　若松しつ子
案山子廼舍東京月並會歌批點

隨感
仁者敵なし

海外
三女傑來遊せんとす
入學者二百七十名
北國アイスランド僙
イヂプト國カイロウ府
盲目者の新寫字法
米國に於ける衣服改良
エレキを用ゐて雞卵を孵化し焚木の代用とす
婦人に金牌を贈る

時報
鳥取市の女子教育◎婦人手藝會◎仙臺市の廢娼論◎藝妓廓設置の請願◎東京府の結婚と離婚

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

賣捌所　東京神田表神保町六番地　女學雜誌社書店

- ●基督傳記　竹越與三郎君著　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢
- ●立志之礎　松村介石君著　全一冊　正價二十一錢　郵稅四錢
- ●教界十傑　田中達君著　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢
- ●政教新論　小崎弘道君著　全一冊　正價十八錢　郵稅二錢
- ●博愛美談　浮田和民君著　全一冊　正價十八錢　郵稅四錢
- ●保羅之傳　松村介石君著　全一冊　正價三十錢　郵稅四錢
- ●眞理一班　植村正久君著　全一冊　正價三十錢　郵稅四錢
- ●函嶺講話　第四夏期學校編輯　全一冊　正價二十五錢　郵稅六錢
- ●基督論　小崎弘道君著　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢
- ●有神哲學　高橋五郎君著　全一冊　正價　郵稅
- ●談林　星野光多君譯　全一冊　正價四十錢　郵稅八錢

- ●婦人立志編　竹越竹代女史編　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢
- ●看病婦美談　博士ニウトン君著　全一冊　正價　郵稅
- ●デビニチー　松村介石君著　全一冊　正價十五錢　郵稅二錢
- ●信仰之理由　小崎弘道君著　全一冊　正價十三錢　郵稅二錢
- ●基督教徒のなぐさめ　内村鑑三君著　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢
- ●コロムブス功績　内村鑑三君著　全一冊　正價十六錢　郵稅四錢
- ●アブラハム倫古龍　松村介石君著　全一冊　正價二十一錢　郵稅四錢
- ●眞如の月　松學居士君著　全一冊　正價十三錢　稅郵二錢
- ●眞理易知　古川道人君著　全一冊　正價十五錢　郵稅四錢
- ●基督の心　松村介石君著　全一冊　正價十二錢　郵稅二錢

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

賣捌所　東京神田表神保町六番地　女學雜誌社書店

- ●我黨の德育　松村介石君著　全一冊　正價四錢　郵税二錢
- ●安息日學校教授法　島貫兵太夫君著　全一冊　正價十八錢　郵税二錢
- ●基督教及哲學　全一冊　正價　郵税
- ●基督教防衛論　四方素君譯　全一冊　正價十八錢　郵税二錢
- ●基督教證據論　フルベッキ君著　全一冊　正價　郵税
- ●聖書名婦傳　全一冊　正價　郵税
- ●西洋德婦美談　全一冊　正價　郵税
- ●幼兒之乳上製　大宮貞之助君著　正價十二錢　郵税二錢
- ●仝　中製　大宮貞之助君著　正價十錢　郵税二錢
- ●仝　並製　大宮貞之助君著　正價八錢　郵税二錢
- ●天啓教と聖書　横井時雄君著　全一冊　正價八錢　郵税二錢

- ●大觀　平岡希久君著　全一冊　正價八錢　郵税二錢
- ●愛之杯　佐藤てう子君譯　全一冊　正價三錢五厘　郵税二錢
- ●大家説教集　松尾音次郎 三上久滿三君譯　全一冊　正價三十錢　郵税六錢
- ●家庭の友　田中達君述　全一冊　正價二十錢　郵税四錢
- ●メレイライチン一代記　全一冊　正價十五錢　郵税四錢
- ●世界最大のもの　横井時雄君譯　全一冊　正價十五錢　郵税二錢
- ●基督之模範　櫻井近君譯　全一冊　正價十五錢　郵税四錢
- ●宗教上の革新　横井時雄君著　全一冊　正價六錢　郵税二錢
- ●基督教及社會　警醒社書店編輯　全一冊　正價十三錢　郵税二錢
- ●本分論　櫻井恒太郎君著　全一冊　正價四錢　郵税一錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十六年
第三百五十九號
十二月九日發兌

社説

やさしき情け（上）

（一）ともに忍びかたき風情あり

村くもの月を隠さんとする、露の草頭より落んとする、ともに、忍びがたき風情あり。花をちらして、台はその行く方をながめ、紅葉をうばわれて木梢は、地上の錦をさぶしとす。皆これ優しき情けにはあらずや。夫れ、非情者の情あること、倘ほ如斯しとせば、有情の人のなさけは、抑も何如にやわらんずらん。つめたしとは、水のさめたるものを言ふ。かの沸湯を見よ、何んぞ其のあたゝかきや。

饑にやせたる狼が血をなめ骨を噛るの躰を見れば、孰か其のすさまじきに戰栗せざらんや。されど、狼の慘逆は百世かわるとなくして、而も其たねの千古盡きざるは何んぞ。彼等が仲間にも、夫婦と云ふはあり、親子と云ふはあり、朋友と云ふもまたあるべし。豈に、彼の血をなむる舌をもて戀に接吻し、骨を折るの手をもつて、其が愛子を抱くとなからんや。孰か、狼に戀愛なしと云ふ。血にわきて、夢を骸骨の上に結ぶの夜半には、寒月冷水もなほ其あたゝかき情を無みするとあらざるべし。

味なき塊をやぶり、頑なの巖をわり、直下千丈の地の底に達すれば、こゝに熱火あり。沸々炎々として其氣さかむなり。但だ外物の之を抑ゆるによりて露われずといへども、時ありてか勃然ほどばしり出で、万丈の光燄を天にのぼせ、千里のうごきを地の一面に傳ふ。この熱や、當時はじめて造られたるにはあらず、たゞ其の本然固有のものを表てにあらわしたるのみ。」秋のさびしきと、冬のさむきとを送れば、天地自づからにして陽氣復り來り、雲こゝちよく飛び、草おもむろに長ず、則はち、枝頭の蕾忽然やぶれて艶なる花ひらけ、香

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

（二）

氣薫じて四面にわかに樂土の趣きあり。之を春と云ふ。春や、此時はじめて天地によりて創造せられたるにあらず。天地固有の温愛、此の機會によりてあらわれ、則はち森羅万象になさけを寄せて、之に春のたのしみを得せしめんとするにはあらずや。

人のなさけも、亦た斯の如し。人と生れて、何人ぞ、情けなきものかあらん。其冷温は、あらわるゝと、あらわれざるとの相違のみ。たゞ夫れ、あらわれざるは、無きにひとし。人は、よく其情けをあらわして、やさしき思ひを事物に寄せずんばある可らず。

（二）。事物おほよそ死したるはあらず

物にいたみ、事にしのぶ、之を人のやさしき情けと云ふ。哀れを知り、慈悲をわきまへ、同情の念あたゝかき人、此の情けを有す。

此情けを有して、事物に接すれば、事物おほよそ死したるはあらず。花の散り、月のかくるゝは、言ふもおろか。小河の流るゝ音は、さゝめくが如く、風のおとなふひゞきは、戸を叩くの心地す。ましてや、虫の吟じて相したふ聲、鳥の翼をひろげて相抱くの様など見れば、昆虫禽鳥もみな吾が同胞なり。

路をゆきて、老ひたる人にあへば、其長年の勞苦を謝し、其の身躰の不自由なるをいたわり。幼なき兒を見れば、其の親の慈愛を察し、其ゆくさきの祝福をいのり。顔色あほざめたる職工夫を見ては、病みて活動しがたく、家にまづしきをなげく人多かんめれと悲しみ。生氣うせ、むかしの色衰ろへて、たゞ〳〵世帯じみたる當年の乙女を見れば、其がホームの苦樂何如ならんと案じ。貧しき人の往來に馬車を驅つて揚々たる官員のをごる様見ては、其覺悟のあさましきをうれひ。之をうらやまし氣に見送る青年または乙女などの心を推しては、うらさびしく歎くの類、大凡そ、家を出れば、路上の千態、万感のたねならぬはなし。情け深き人の心は小止みなく動く、其眼はつねにうるほふ、其胸には斷えず血あり。

世に騒々しき人あり、ツベコベと世辭を言ひ、餘計の世話をやき、兎角信切ぶりて、万事をおのが情けにて立ちゆく樣に吹聽す。凡そ、かゝる人に、眞の情けあるとなし。眞の情け

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あるやさしき人は、多くは、默するものなり。止みがたくして沈默を破るとも、至つて言葉すくなきものなり。わざと、表てを冷やかにし、知らぬ風して裏面を調のへ、其事のあらわるるを恥ぢて、ちとの赤面するなど、寧ろ此人の僻なるべし。決斷の遲々たるが如きは、容赦するこゝろのあつければなり、發言の快迅ならぬは、言ふにはゞかればなり。心中限りなきの情は、先づ、胸を刺し、眼こに出づれど、言行の表てにあらわれて、人に見らるゝは、最後なり。

かゝる人に限りて、時として非常の事を成すとあり。其時や氷よりも冷たく、疾風迅雷よりも速やかなり。俄然一變して、中心、大鬱勃の氣象を迸發す。其さま、ひごろの情けぶかきと矛盾するが如けれど、之も亦た一種の情けなる耳。其冷々たるは、或る事に熱するによる。其の果斷決行は、或る事に激するによる。されば、かゝる人の打つ鞭には、涙のしめりあり、其揮ふ刃には、握手のあたゝかみあるべし。此を以て、首を切られて怨みず、足をきられて、恩を記念す。必竟、たゞ優しき心の變相なるがゆゑ耳。

(三)

交詢

○「大丈夫の秋のくれ」につきて

拙き筆をも顧みず先生樣に申上候小生は兼てより先生樣方の御持論をば絶えず女學雜誌、評論の紙上に拜見仕り常に感服致し何時かは先生と面語しくわしく御高説をも承わらんと思ひ一度は……但だ雜誌上に寫し顯さるゝ種々の御高説に據り幾分かは覺る處有之候も尙ほ隔靴搔痒の感有之候誠に先生方は其文に其言に至誠人情の極微を穿ち言ひ難き趣味を寫し出して實際人心の幽情を説き明さるゝこと小生が感服措く能はざる處にして遂に愚鈍頑强の小生をして女學雜誌の愛讀者とならしめ候事誠に驚入候申さば小生の位置が不思議にも先生方の書き顯はさるゝ有樣に立つか或は諸先生方の或る御方と境遇を同ふするかと存じ御高説中には小生の境遇を記さるゝにはあらざるかと存候事每々に候是迄女學雜誌評論中には絶へず注目仕り一々感伏致居候然るに近時小生が情况

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

よりしての女學雜誌に記載せる一項は胸を刺し感奮措能はず情思禁ずる能はず終に先生を煩はし御高說を仰がんと存候。誠や小生は本年夏の頃迄西國の或る田舍に住ひ年老ひたる父母の獨り子として愛育せられ教會の兄姉よりも熱き同情を表せられて漸く無事に又樂しく故山のホームに暮し居り候ひしが今歲七月遂に最愛の父母の膝下を辭し愛する兄姉と別れて東都に來り終世を犧牲とし或る事業に捧げんと決意仕候ものに候。

時に觸れ折に際して郷關眷戀の情禁し難く心身都に在ることを全く忘れて夢幻に故山を追想し其追想したる思ひに聯感して幽暗より煩惱に陷いり自ら吾れあることを忘れ冷き涙の中に胸間の熱光を靜かに消すこと屢ばに候まして此晚秋都門の人多くして友なきさびしさは一層故山の思と、ありし昔の夢の跡とに拘はらしめ小生をして不意に驚かせ候と度々にして其都度數分胸痛の後只靜く人知れず默泣するの外無之候殊に女學雜誌第三百五十八號隨感中「大丈夫の秋の暮」の項を一讀仕候時如何にして女學子は斯くまで小生が胸中を洞察明鑑せられたるならんと存じ自からも人の事ならじと思ひつゝ讀み去りし後始めて吾れと全く同じ感を有する人も世にありと悟り申候小生が机邊の一菊花常に小生を泣かしむる事、小生が花に對する思ひの切なる事、聲なき聲を飲み寂凄苦悶訴ふるに由なき事、只小生が愛藏する隨感錄一冊に此等時々の感を記入するを最上のうさはらしとなす耳に有之候。

小生が申す有りし昔の夢の跡とは小生が嘗て結びし初戀の夢に有之候三四年前より物の哀はれを知りそめて小生が半身小生が魂の影とも思ひ候者の今あるが如くあらぬが如く無と知つゝあり有りと思へど實際なきに等しき有樣靈々互に依托し赤心誠情互に約せしも風雲の起る處浮世ならん兩々互に涙を飲て約(心中に結びし其誓約)を解かざるべからざるに至り最愛は慘然決意して終世を或る慈善醫業に供し不婚不歸と定め今も尙ほ日夜苦學しつゝある事小生も半身と思ひし最愛が吾が爲めに執りし決意を聞き半心を失ひてより吾半心に喪服を着するの覺悟なれば何かは默々いたすべき冷たくも生命なき事業の爲めに小生が生命なき心身を供する事に決意し目下只管ら其方向に進みつゝ罷在候嗚呼、然し、先生よ小生は斯思ひ決意仕候も尙ほ有し昔の事を考へ出す度每に何とも

云ひ能はざる苦痛に襲はれ吾れ吾れを忘れて紅涙を随感錄上に落し候或る時はダーク、サイドを眺めて人世を厭嫌し青雲の念を風塵と觀じ朋友疎く我れといふ我れ何をなして可なるかを辨せざるに至ること屢ばありたゞ辛くもブライト、サイドを望みて小生は果して天父の命じ玉ふ所を異日なすべきの地あらん目下の苦痛はヨブの試錬よりも輕し吾が終世は貧民と知れぬ無數の細民職工との爲に獻ぐべきなりと思ひ回し吾れと同じく苦痛に陷る者の明光とならんとの決意を起し候も此の希望はやゝもすれば迷ひの雲に掩はれんこと何より悲しき事に候目下の事業は屢々其迷雲に曇らさるゝ事故甚だ危く自からも立の望みの道を脱したるに非ずやと疑ふ程に候嗚呼先生小生は確に其源因は存居候然して此れを醫するの道又救濟するの法に暗くたゞ〳〵常に絶へざる苦がき涙を飲み人知れず袖を濡らし冷氷に熱火を包まねばならぬ事何より胸苦るしき事に候而して最愛は父母に離れ兄姉に別れ昔しの愛人は時に途上目迎することあるも默して會し默して過るなり春風花を咲かせ春風之を散らし夏もすぎ秋來り枯葉冷風に舞ふて小生を愚弄するが如し敢て先生の高敎を乞ふて以て幾分か安きを得んと欲す先生秋深き日頃机邊に倚りて枯れなんとする菊花に對し實際雜誌に示し玉ふ如き觀念を抱ひて獨凄空恨永遠の冬夜を來らせんとする者あるを思ひ玉ひて幸に同情の念を垂れ其の行くべき道を敎へ玉はゞ小生が喜び甚だ大なるのみならず小生が生命とも相成るべく候敢て不敬を顧みず先生が清耳を汚がす御叱りなく閑時御敎示被下樣奉願候

十一月廿七日夜　街路人跡絶えるとき　知美小史

○右へ答　しのぶ

心を讀むと淺く、同情を寄すると淡き身のくせとして、虚を目して、實となし、假をあやまつて、眞となす。到底もとめ玉ふ御心に中らじと思ふこそ、先づ以て遺憾なれ。然りと雖ども、告げ玉ふが如き情態は、藥の以て醫やすべきにあらず、まして淺々しき人言のよく何事を奏せんや。たゞ「限りなきの眞心をもて同情を寄せんとするもの世にあり」との一事を念じて、せめては幾分の心やりと爲し玉へかし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世の中はむなしきものと知るときし、
いよゝます〳〵かなしかりけり（大伴卿）

之ぞ浮世の常なりと論つろわんに、其論、心をやるに何の効あらんや。理屈は、よろひかぶとの如し、身に着くるともヒタとつかず。たゞとつて君に同情を表し、君の痛みを痛みとし、君の泣きに共に泣くものありとのみ申さん哉。

たゞ〳〵一事を告げん。戀愛は必らずしも同棲にあらず。心、相許して情けの底に誠をひめ置んときは、見ざるも尚見しにひとしからずや。此赤誠を傾盡して何事かの事業に獻身し、これわが「意中の人」なりと認ためんには豈に亦た多少のなぐさめなからんや。ツヨン、ブライト、妻を失なひて、悲痛止むときなし。則はち一身を穀物條例廢止の運動に寄せ、熱血を之にそゝぎて、僅かに悶々をやりぬ。君、請ふ此一理に注目せよ。

さびしき時、心切まりて、さめ〴〵と泣く。無情の人は之を評して、女らしとも、意氣地なしとも言はんか。そは、無情の人の評なれば也。君もし此般の經驗あらんには、われは一言を寄せん。この時、君翻然として思ひを轉ぜよ「この誠、以て世の公益に移すべし、この愛、以て事業の妻にさゝぐべし」と。斯て、世の貧しき人、世のあわれなる人を念々すれば、少さか以て慰さめを得べけん。これ、實際經驗の人が、苦き修練の後に得たる秘訣なりとぞ傳ふ。

世には、良人ある乙女もなり。未婚の寡婦もあり。妻あり乍ら獨棲にひとしき男子もあるものを、茲に家を同ふせず、床を一つにせずと雖ども、誠心相許して毫も疑がふとなく、心を或る事業に限りて他に移さず、もつて意中の人の爲めに固藏せんとするものあらば、之れ眞とに上乘の伉儷にはあらずや。かゝる人は、其約破れたりと雖ども、結ぶとの固き、之に過ぎたるはあらず。

然りと雖ども、眞の戀愛は、眞の獻身、眞の非利己なり。眞に、他を愛するものは、須からく他の最上の幸福をいのるべし。わが獨身の決意、彼に知られ、彼れを促がして彼をも亦た獨身に送らしめんとするとあらば、未だ以て戀愛の道を盡せりと言ふべからず。こゝに於てか熱情

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は、冷情に似るとあり。つれなく他の戀々たるを斷ち、早く意を決して新らしき生涯に身を入れしむるの工夫肝要ならん。これ心血をしぼり、胸涙をからず、最痛苦の時にして、而して亦た獻身愛他の絶頂なり。近松子、屢ばこの情をうつして、千古有情の男女に限りなきの友意を寄す。この覺悟、何人にも語るべからず、この經驗、何人にもうつす可らず。たゞ獨り知り、獨り味わひ、齒をくひしばつて、獨り眼底に涙をかくす耳。

ますらをや、かたこひせむと、歎けども、
しこのますらを、なほこひにけり。（舍人皇子）。

理學

地熱（二）　けい子

石炭盡くるの時、之に代るべきものは、前にも言ひしが如く、電氣なるべきこと、今は殆んど疑ひなきもの丶如し、去れど吾人は思はざるべからず、吾人は實に地球なる大熱塊、其外面の少しく固結し居る所を賴みとして、覺束なくも生息し居る者なり、是等の點より觀察すれば、人生の賴み難き、實に風前の燈火にだも劣る所あるが如しと雖も、其果敢なく淺猿しき割には、吾人は實に大膽なる能力を享有せり、凡地上にあるもの一として吾人の爲めに其用を爲さゞるはなし、虎豹も慣すべく鷹も養ふべし、況んや光熱に、水に、空氣に、之を利用し之を應用する、何の難きことか之有らん、其然り、吾人は石炭の代用物として電氣を應用する、素より不可なる所なきのみならず、理學進步の兆として、人智開發の證として社會の爲め大に慶賀すべきことなりと雖も、退いて之を思ふに、吾人は現に此一大熱塊の上に生息しながら、之を應用するの道を講ぜず、區々たる前世界の遺物なる石炭の欠盡位を恐れて、汽車汽船の將來を慮るは、實に小膽も亦甚だしと謂はざるべからず、斯くいへばとて、吾人素より電氣の應用を不可なりといふには非ず、只電氣と共に地熱の應用をも忘れざらんことを希望するに過ぎざるなり、今地熱を利用したる實例一二を爰に掲げんに、匈牙利の都府ペストにては、三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

千五百尺餘の深井を穿ちしに、之より華氏百八十度許りの温湯噴出せり、其量每日七万五千ガロンの割合なり、故に同府にては此温湯を導管に導き、公有の温泉場を設け、更に又小管を設けて、之を各家に導き、日常の用に供せり、其便利なることなか／＼に筆紙の能く盡すべき所に非ず、加ふるに其噴出の勢頗る烈しく、驀然地上三十五尺の高さに及ぶを以て、其近傍の氣候一變し、流石の寒國も、時ならぬ春光を見るの心地するは、偏に此地熱應用の賜物ぞかし、此工事を起す爲めに、同府にては二十餘万圓の費用を費やせしが、工事の結果に徵すれば、頗る低廉なる入費といふべし、去れば此費用は、府民全躰にて負擔すること、恰かも我東京にて、水道工事の費用を府民にて負擔するが如きものならん、又合衆國紐育府ロックポルドにては、滊關を設置し、熱水を二百餘軒に輸送し、之を以て室内を暖むる暖爐の代りとし、又は庖廚に導きて煮燒の用に供せり、但し其熱度の高低は、地を掘るの深淺に依ることにて、地を掘る愈々深ければ、其熱度愈々高く、地下一万尺以上に達する時は、沸騰點以上の熱湯を得ると云ふ、是等の例證に依りて見る時は、地熱は第一、第二の熱原として用ふるに、頗る適當のものなるが如く思はる、石炭の欠乏を憂ふるの人、翻つて此方法に依て研究する所あらば、其得る所は思ふに少小に非ざるべし、以上の實例を應用して、我東京府に一の深井を開鑿したりとせば如何、驀然たる熱泉の沸騰は、如何なる極寒の節と雖も、我東京市をして常に温暖の春を保たしめ、家々暖爐を燒くまでもなく、鐵管滾々として温湯を送り來れば、室内常に暖かにして、行動自ら自在なるべく、彼冬籠りなどゝて、終日を懶惰なる巨燵の中に消し、軒端の雪時に崩れて、窓外の閑寂を破るなどの詩情はありながら、此文明多事の光陰を、可惜爲すこともなく費消するの弊を救ふを得べし、殊に意外の幸福を得るは、下婢其他水仕事に從事するの人なり、曉鴉一番夢を破らるゝだに物憂きに、餘眠未だ去らず、早く已に氷を敲くの苦惨を忍ぶ、宜なり其手指龜裂し、痛痒暫くも其體を離るゝの遑なきことや、然るに此法一度用ゐられば、是等の痛苦一朝にして洗ひ去らるゝと共に、彼の賣藥店頭得々たるヒヾ龜裂の妙藥なるものは、忽ちにして其痕を留めざるに至るべし、吾人は實に此事の彼の慈恵醫院其の他の如く、最も博愛なる、最も慈

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

仁なる事業なるべきを信ずるなり、又我國の洗湯なるものは之を衞生上よりいふ時は、素より其利益多かるべしと雖も、之を風敎上よりいふ時は、實に少なからざる缺點の其間に存在せずんばあらず、是等も亦地下熱湯の應用と共に、各所に大共浴場を設置するを得べければ、其際を以て如何樣にも之を改革して可なり、又方今我國には温泉行の流行、一層の盛を來せり、去らぬだに、春花秋葉、都門の眺めさへ愚かならぬに、車を山林水郭に驅る、其風光の清麗を賞するは、坐ながらにしては難しと雖も、箱根に伊香保に、温泉の靈を賞し驗を愛づるは、此法の行はるゝと共に、遠く之を城外に求むるを要せざるに至らん、若夫夏宵月明らかなるの夜、浴止んで高樓涼を納るゝの快味、强ち富貴顯榮の人に限らずとせば、其樂しみ果して如何ぞや、今や東京には水道工事の計畫あり、日ならずして市內の家々は、釣瓶を用ゐて水を得るの苦辛を免かれ、恬栓僅かに動きて清水滔々たるの樂境に至るべし、是に若此温湯の自由をも加へて、一管は冷水、一管は温湯、之を得る只栓を捻するの如何に在るに至らば、生活の自在豈啻に僕を増すのみに留まらんや、

論說

女子敎育と武道

（女子夏季學校講演筆記）

星野愼之輔

演者曰く講演の當日腦病宜しからず思考錯雜して語調亂激を覺ふ、ここを以て筆記者を苦しめ聽者を惱ませしの罪を悔ゆ、果せるかな今其筆記草稿を見るに亂麻の捉へ難きが如し、因て繁を省き要を摘み爰に訂正して稿を寄す。

花の如き心を愕かし月の如き深窻を騒がせて、爰に女子敎育と武道の必要なることを述べしむるは、抑々時世の餘義なくせしむるに由るか將た又斯道の氣運に由るか。凡そ此問題に付ては先づ武道といふことより明かにせずんば現今人士の腦髓には得て了解し難きを如何せん、然れども一席の辯に於て到底然ることを得べくもあらず、况んや言外自得の思想たる道觀は言語文字に現はし難きものなるをや、願くは吾人をして左の四問題を說くにとゞめしめよ、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第一、女子武道の敎育に於ける賛否論者に付て
第二、武術と武道との區別に付て
第三、女子の精神的修養法に付て
第四、武道敎授の注意に付て

以上の順序に從ふて說き進まん。

第一　女子武道敎育の賛否論者に付て。

人世の潮流は大渦を卷き〱て流れゆくなり、運命の花は此大渦に漾々としてたゞよえり、賞賛と非難との聲は到る所に滿ち〱て每に相衝突しては小渦を爲し、無數の小渦また相擊ちて共に勢ひを高め以て大渦を爲しつゝ人世を流しゆくめり、一事一物は此潮流の間に起りて水これに激する巖の如く、一賛必ず來りて一非必ず伴はざるなし、歲月久しく誤解の中に埋沒せられたる「武」の道を唱道するや、無責任なる門外漢が大早計なる冷評非難の聲を放ちしは無理ならぬ事なく、そも武道の運命はいづれの岸に漾ふの花とやなるらん、顧れば三年の前なりしか、明治女學校生が帝國ホテルに女子の武技を演ぜしは、蓋し敎育の意味を以て社會に現れたる近時の嚆矢たるべきか、爾來輿論は忽ち起れり、賛成するもの出で、非難するもの出で、賛非共に種々其據る所を異にすれども要するに大差あることなし、吾人は一々これに對して或は賛同し或は論辯するを要せず、そは武道と稱する吾が觀念を明かにせば自ら了解し得べきを思へばなり、先づ非難者の要點を掲ぐべし。其第一論者の曰く、女子の武藝三昧は必ず殺伐の氣風を養ふて荒〱しくすべく且や女子の腕だては固より無用の長物なるべきにと。第二論者の曰く、武藝の中にても柔術の如きは今日の時代に或は宜しからん然れども薙刀の如きは戰國の遺器のみ今日此無益の長器を弄するの必要あることなしと。第三論者の曰く太平の世といひ穩雅柔順たるべき女性に爭氣を起さしめて戰國氣風を養ふの害ありと。思ふにこれ其門に入りて實踐工夫せる人の言にはあらざるべし、其第一論者は武の入口を遠見して堂奧を窺はざるの稚言あはれむべく。第二論者は武器に拘泥したる實用論者にして形而上の事など話しがたき小兒論なるべきか、其第三論者の杞憂は斯の道の志す所と反對せり、太平の世なればこそ、更に爭氣を去せんと思えばこそ此の修行を唱道するなれ、輕跳浮薄を矯めて敵意を滅せんとするは吾が武道の主義なれ、これ戰國

時代に發生したる或る武術家の主義とは全く反對なる所ろなり、蓋し何れの武道も其奥義は形而上の道に到達するものにて是れを誤解せしめたるは形而下に止まりたる武藝家多かりしを以てなり。

偖賛成者は如何なる言を以てせしか、今其重もなるものを案ずれば先づ第一賛者は曰えり、女子の躰育は今日甚だ遺憾とするもの多し武術最も然るべしと、是れ羊肉を賛して狗肉の功を説くものゝ如く却て迷惑の贊評といふべし、吾人不肖なりと雖ども世に熱心なる躰操諸家のあるを知る、更に多く名醫の奬勵するもののあるを知る、何を苦みてか躰育の意味のみを以て武道を勸めんや、躰育の如きは斯道を修むるの副産物とも申すべきか、彼の精神的の緣を離れて器械的に傾きし西洋流の躰操とは暫らく別問題として考ふるを要す、技術と精神とは進歩につれて分業の有様を爲し來るは物質的の進歩とこそいへ精神的の退歩とこそいはめ、豈躰操の末技を以て武道を談ずべきの痴あらんや、第二賛者の曰えらく、外交多端の今日腕力は毎に其裏面に勢ひを示せり此危險なる現今なればこそ全國の男子は皆國民軍の義務あるにあらずや獨り女子のみ傍觀して一朝事あるの時手を拱きて止むの愚を學ぶべきや女子の武術奬勵すべしと、善いかな此志や、然れどもスパータのライカルガス的手段は吾人の操返さんと欲する所に非す、若し此論法ならば恐らく薙刀等の古器よりも更に便益鋭利なる砲銃を習ふこそ宜しかるべし、是れ又吾が談ずべき人にはあらざるなり、第三の賛者は曰えらく、日本女子は柔弱なり無氣力なり此氣力を奮起せしむるもの武術に如く可らずと、是れ一理あるの論と雖ども又壯士的贊語に近しといふべし、此流の論者は恐らく美術を國家の贅物と罵り女は男より腕力乏しきが故に劣等人種なりと斷定するの輩にやあらん然れどもこれ最も進みたるの論とや言ふべし。

此の如く種々の賛者は却て武道奬勵に方を添ゆるが如くして實は誤解の価を作るの敵とやいふべく、識者の笑ひを招きて進歩の妨げを爲すこと多かりし、贊非兩者の志を謝して更に一歩進めたる武道の意味を會せられんとを望むの他なし。

義を守ること唐がらしにならへ　芭蕉

色をおもふと温飩のごとくせよ　去來

史傳

○鷹山公閨房の雛あそび

米澤の鷹山公は、御養子にて上杉重定公の嫡女幸姫の聟となり玉ひしなり。然るに、幸姫は天性多病にして、大婚のそのころも、僅かに十歳前後の乙女に異ならず、もとより春意を解するにもあらねど、鷹山公は、反つて其不幸をあわれみ、小供をあそばする如くもてなして、雛かざりの戯などし之を慰さめ、更に之を厭ふの風なかりしかば、夫人が公を慕ふと宛がら親の如く、公在らざれば怏々として樂しまざるほどなりしとぞ。然るに、養父重定公は、年を經るも夫人に姙娠の摸樣なきを見て、ひそかに寵の絕へたるにやと疑われしが、天明二年、夫人年三十にして長逝したる時、其かたみにとて平生夫人が着用せし衣服を重定公に贈られしに、皆これ小兒の衣服にひとしきを見て大に驚ろき、致仕以來相見ざること二十餘年、かゝることは知らずして、此の不具の女を連添わせしこそ、我一生の誤まりなれとて、深く後悔せられたりとなん

夫人は、生前常に其身の甲斐なきを嘆き、しば〳〵公に對ひて妾を置かれんことを勸めしも、公は常に之を拒み、江戸詰の諸士誰一人として妻を俱するものなきに、寡人ひとり此の事あらば色を漁するの罪免れがたしとて遂に之を聞かず、封を世子治廣にゆづる迄、江戸在府の時は、常に空房にて過したり。

○婦人のデリケシーは沈勇なり

節操のつゝしみは、女の花なれ。斷頭場に臨むとき、ひそかに、月のものを清め、牛の角にかけられて、裳をかきあわすなど、沈勇の最上乘にはあらずや。乙女、コーデリアが、ドミシアンの命により、生き乍ら地中に埋め殺さるゝとき、穴に引下げらるる途端、裳のはし少しくたぐれたるや、直ちに身を轉じて之を整のへんとしけるが、或る兵卒の手を出して之を助けんとするを見て、叱して斥ぞけたり。心なき男に一指をもふれしめじとて也。

○油斷大敵

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寛永の頃にかわらん、永井信濃守尙政、頻に昇進して寵任せられけるが、其頃井伊掃部頭直孝、一代の元老にておはせしに、ある時邂逅して我等事弱年の身にて特恩を蒙りて、重職を務め候事誠に至極と申べく候。そこ許には御老功の御事にて候へば、我等心得にも成るべき事、思召よりも候はゞ仰きかせられ候へとあれば、掃部頭先感じて奇特なる御心得にてこそ候へ、いかにも一ッ存じよりたる事候まゝ傳授し候べし。されども大切なる事をあからさまには申がたし。彌々御聞ありたく候はゞ、某が宅へ御越候へといはれしかば、日を定めて禮服を着し彼宅へ往れしに、掃部頭出て對面の後、世話に油斷大敵といふ事、定めて御覺えあるべし。某が傳授外にはなく候。この一言にて候ぞ、必らず御忘れあるな、といはれしとぞ。

みやこなる荒れたる家にひとり寢ば
　たびにまさりてくるしかるべし。
世の中はむなしきものとあらむとぞ
　このてる月はみちかけしぬる。

雜録

紅葉、今昔ものがたり　石翁

上　酒を煖めて紅葉を燒く

高倉院、幼主におはせし御時なり、柔和におはしましゝが、其比、紅葉を愛でさせ玉ひ、北の陣に小山を築きて、萩、楓の色うつくしきを植ゑさせ、ひめもす叡覽ありけり。ある夜、風はげしく吹きて散れるもみぢ葉、錦をしけるが如し。殿守のもの、朝清めすとて、殘れる枝、散れる木の葉をかき集めて、あしたの風さむかりければ、酒を煖ためんとて、之を薪にしけり。こゝに、奉行の藏人、いかなる逆鱗にか、かゝるらんといぶかりけるに、君きこし召され、殊に御心よげに、打ち笑ませ給ひ「林間に酒を煖めて、紅葉を燒く」と云ふ詩の心は、唯が敎へけるぞや、やさしうも、したるもの哉と、いと興ぜさせ給ひけりとなん。

下　錦衣を以て土と人とを温たむ

落ち散りたる木の葉は、必らずしも直ちに掃ひ清むべからず。地上に錦のしとねを延べ、うらやましく木梢を眺めたる有情の土を被ひ、しばしなりとも之を温ためんと、亦一つの風流にはあらずや。

而して後ち之を掃除せんには、之をかき集めて、あき俵などに入れ、貯え置きて燃料となすべし。尾州の或る人は、年中之をのみ用ひて風呂をたくとぞ。風呂をたかば、隣の人に馳走し、其さむきを温たむべし。木の葉を堆だかく塵すて場に積み上げ、臭氣を放ちて隣人に迷惑かけんとする人に比らべては、殊勝の心掛、天地の相へだたるが如し。

風流と、經濟と、相そむくものにあらず、黄金をちらして、花車をきそふは、純美を知らぬ白痴ものなり。天地の經濟を見よ。何んぞ其節儉にして、而も美くしきや。

非レ儉無二以養一レ廉、
非レ廉無二以養一レ德。

〰〰〰〰〰〰〰〰

本邦女醫の由來及其前途

荻野吟子

(中)

◎◎第一、女子が醫學に於ける適否

予は之を内務省試驗委員に聞く、曰く醫術開業試驗に於ける女子が成蹟は比較上男子に勝るものありと。予は今試に内務の開業試驗の何物たるを記して、識者の一考に供せんと欲す。即今前期の試驗と假定せよ、彼の複雜緻密、而かも悉く暗記を要する解剖、組織、化學、物理、生理學の五科に對する、僅に十個の問題は以て、無數學生の成敗を決す。抑も内務省が私立學校に對する、之を大學若しくは諸官立學校に於ける試驗法に比して如何なるかは、識者之を識らん。官立諸學校に試驗落第者少なく、内務省開業試驗に過半意を得ざるものある、蓋し其證なり。人或はいはん、落第者の多少は一に、成蹟の如何に關すと、或は然らん、若し夫れ雲を凌ぐ高樓完備せる器械、教師に尊嚴なる肩書あると、規則の飽迄酷重なると此等都てが生徒を完全に發育せしむるものなりとせば、無援孤立、勢ひ之等のいつれをも具備し難き私立學校に落第

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

者多き、豈至當ならずや。然るに尙此困難なる試驗に於て、女子の成蹟は前に云へるが如し。

今や眼を轉じて、泰西諸國を見るに、苟も文明を以 任ずるの各國、一として女醫を公許せざるものあるを見ず。殊に露の如きは其尤も盛んなるものにして、殆んど男醫を凌ぐの勢ありといふ。余が卒業せし當時論者が非難の口實とせしものは、醫師の祖國ともいふべき獨逸にして、いまだ女醫を許さざるに云々、然れとも之れ却て日本が之を要するの確證とはなれり。見よ富める家の子は、金の貴きを知らず。隨て自ら起て働くの必要を感せざるなり。獨逸の女子は例へば、富者の子の如し。之に反して當時の英、露、米、佛の如きは、例へば一家諸共に勞働に衣食するものにして、醫道に於けるの貧家なり。故に一旦醫たるを公許せしものは、徒らに座食する女子に向て殖産の仕事を分與せると一般、米、露の各國頓に斯學の隆盛を致せしもの、敢て故なきにあらざるなり。今や日本は前二者のいづれに屬するものぞ。醫道の進達今日に滿足し、醫師の現在數(明治二十六年一月一日調査によれば)全國醫師の數四万九十三人內、開業試驗を受けしもの六千三百七十三名、大學校卒業のもの千四百二十二名、高等中學卒業七百十七名、府縣醫學校卒業のもの千五百六十四名、奉職履歷千四百八十二名、外國醫學校卒業のもの二十八名、而して從來開業のもの二万八千二百九十六名なり、限地開業二百十三名なり、此中限地開業及び從來開業醫を合せて二万八千余は、遠らず新陳代謝を要する漢法醫、若くは知事か特別請願を以て適當の人を得るの日まで、假に其一村若くは一郡に限り、施術し得るものなるか故に、之を總數より引去るに於ては、日本政府か明かに、其開業を公許せるもの僅かに、一万一千六百餘に過きず。今や總人口四千五百万とせば、日本人は四千人の衆を以て、僅かに一人の醫を有し得るのみ。換言すれば一人の醫は四千人の爲めに、奔走勞を取らざるべからず、之を歐米の各國に比し果して如何況はんや獨逸已に女醫を公許し、更らに大學に就業するの特權を與へしをや。聖經に曰く、先なるものは後になるべしと。日本女子は獨逸の婦人に先ちて、歩を醫學に着けたり。然るに我國大學の門は、尙未た開かるゝに至らず、嗚呼。

或論者又曰く、婦人は妊娠といへる男子と異なる特點あるを

以て、患者を委託するに不安なりと。是言一理なきに非ず。然れども男子といへば、悉く無病なるを得るか、女醫よし妊娠したりとて、十ヶ月の間一日も業を執る能はざるに非ず。蓋し多病、柔弱、不品行なる男醫の少なからざるは、世人の普く知る所なり。誰か醫學は女子に適せずといふものぞ。乞ふ少しく再思する所あれ、予は更に進んで女醫の必要に付き聊か意見を述べざるを得ず。

◎第二、女醫の必要

凡そ人心は時世と、境遇の爲めに變轉するともやあらん。然りと雖も之れ或る塲合に於ける現象即ち周圍の風物、邦家の制度などは勿論幾多の沿革を經たりと雖も、女子が秘密なる局處の疾病に、男醫の診を乞ふを憚るの人情に至ては、古今東西其軌を一にして決して變更あるを見ず。然ればにや古の女帝、之に對するの策を講じ、歐米各國又玆に志るところあり。獨り今日の日本のみ女醫を要せずとなすか、且つや現今の時世は優勝劣敗の法則に制御さる一本の草、一粒の土必要なくして世に存在するものあるを聞かず、予は實際女醫が世に存在するを見る、否女醫が日と共に隆盛の域に進むを見る、故に予は女醫の必要を知るものなり。特に婦人科、小兒科、産科の如きは女子ならずして得て、完全の診察、手術を施し得ざるを信ずるなり。

書架

常將不盡還天地、
別有無窮待古今。

○岡山孤兒院未曾有困難の記事

近頃ろ世に出る刊行書類多くありと雖ども、岡山孤兒院報告の如く、神聖にして有益なるものはあらじと思ふ。其の枚數の少なくして、其記錄のたゞ一小院の事にかゝるを以て、輕んずるとなかれ。もし其の日々の報告を讀まば、教訓之に過たるはあらじ。もし其の月々の報告を集めて之を合綴せば、異日明治年代第一等の貴著作となるべし。故に、吾人は本誌の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

讀者諸君に勸告す。院に要めて、月々、其報告を請ひうけ、一面に於ては、此の驚ろくべく懸念すべき信仰の團躰が、何如にくらし行くを知り、他の一面に於ては、之に多くの敎をきゝ、正しき刺激を受けらるべし。通常は、郵劵二錢を送るのみにて、月々其報告を請ひ受くべしとの定めなれど、同時に相當の寄附を輸たさば、更に一しほの殊勝ならんか。院は岡山にあり。

今ま、十月の報告を讀むに、日々寄附金乏しくして、院内の困苦一と方ならず、役者しば〳〵衣服を賣り、もはや一物をあまさゞるに至れり。而して、其の十八十九兩日は、尤とも記臆すべき日にてありしが如し、記事文に曰く

◎十八日　墓場に於て院役者の祈禱會を開く

西山君は男兒三四名と共に被害地なる淺沼氏內片付の爲め出陣夕方花畑の有志者は本院に來りて米四斗を炊き結飯として被害者に施す

本日の所感

今まは孤兒院設立以來未曾有の困難なり余は此困難に出てあい今日までの大主義に疑を抱くに至れり否之れ天父の聖手の短きにあらず余が潔からざるが爲なり主よ僕を潔め玉へとは予が近來滿腔の希望なり于時午後第七時之れ余が失望の極點なるべし」

このことを記錄する中横濱林翁氏より金一圓禁酒小册子及び草標と共に惠送せられ又網島佳吉君よりは德富氏よりの寄附金は同君より友人に托して送りしに其儘出奔したる旨通知ありたり空乏の時に當りては來る可き金もかゝるとに由つて遮ぎらる舊約書よぶ記五章十七十八に曰く「神の懲らしめたまふ人は福なり、されば汝全能者の警責を輕んずる勿れ神は傷け又つゝみ擊ていため又その手を以て善醫しまたまふと」今日の困難は之れ即ち吾等を强めんがために賴ち玉ふにあらずして何ぞや

午後第九時より十一時迄滿二時間本堂に於て男女院役者二十餘名の祈禱會を開く予は兄姉に向つてかく困難の打つゞき來るも吾等は今日までとり來りし主義を貫くべきか或は必要の者は必らず加へらるべしと信じて掛にて米等を買入れ衆兒に與ゆべきか敢て諸君の意見を問ふと二時間の間此問題につきて互に相語りしも終に決せす一人の兄弟進んで曰く此時に當りて余は殆んどなすべきとを知らす由つて余は思ふ明朝一同操山に上り食を斷ちて祈らん主は必らず往くべきの途を示し玉ふべきのみと之を贊成し十一時過各々室に歸る

◎十九日　六時半操山に登る而して常に祈るところの老松の下岩石上に坐し默想暫くして新島先生の歌を憶出せり

主義と立ち主義と倒れん我身かな

なにわの夢の世にしあられば

それよりして伏して祈禱中天よりの決心を與へられたり曰く「たとひ衆兒を餓えしむるも主義を枉ぐる勿れ」と

午前九時他の兄弟等も續々上り來りたれば共に相集りて祈禱會を開く

余は始めにヤコブ書一〇二より八までを讀み吾等の有樣實にこゝに錄されたるが如し之れ斯くわれらが試煉を受くる所以なり如かず主義を枉げて活きんより主義のために孤兒院を枕として餓死せんには吾等主義のために餓死する猶ほ恰も主キリストが十字架上に死に玉ひしが如し死後必ず孤兒院は之れがために隆り且永遠に發達す可し然らば即ち吾等は即ち殉敎者にあらずや主キリストの聖旨を信じ之を守りて斃るゝは之れ吾等の本分なりと於是衆皆な然り然かす可し主義のために斃れんと叫ぶ而して共に

一　いよ〳〵主義を確守する決心を與へ給ひしとを感謝し

二　今日まで(四日間)の米代の不足金を與えられんとを祈り

三　主義のため喜こんで斃るゝまで働くの勇氣を與えられんとを求む

祈禱中孤兒の一人某師よりの寄附金四圓を持ち登山し來る之れ決心後第一の御惠なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

始めわれらが登山するや若し主が必要のものを與ゑ給はざれば再び下山せず餓死を決して祈るの覺悟なりしが主は千万金にも代ゆべからざる大决心を吾等一同の上に與ゑ給ひければ吾等は斃るゝまで常の事業を勤めんと祈禱畢るや喜び勇んで下山す

山を下り歸院の途中金壹圓ペリン氏よりの寄附なりとて一孤兒の持ち來るに遇ふ

正午十二時全院二百餘名のものを本堂に集め操山上の决心を告げ大主義の下に生死を共にせんことを勸む一人の兄弟偶ま此集會に列せられしが途中にて立ち去り暫くにして金貳圓を寄附せらる

一時過伏見橋本丑之助氏より金九圓貳拾錢を惠送し尙ほ衣類八十四點を送りしとの通知來る

暫くにして米屋來れり由つて過る五日間に於ける米代不足金を計算せしに金貳拾三圓三拾九錢となり居れり

已に石を「パン」とせずとの大决心をなしたるが故夕飯は全院（病者幼年兒を除く）斷食、然れども誰一人の悲しき顏色をなすものなく主の與へ玉へる杯を呑めり殊に余をして感歎斷腸の思を起さしめたるは終日水災被害者を助けて泥砂の排除に盡力し日暮れて歸り來りし小兒なりし彼れ歸り來りしが故に食を勸む彼れ已に其友より今夕は斷食なりときゝ居りけん答へて曰く「ホシクナシ」人みな斷食す吾等また喜んで食に着かずと金米欠乏のため全院斷食せしは設立後今夕を以て始めとす

夕方六時半熊本グリスウオルド師ヨリ金拾八圓寄附し來る偶ま炭谷姉も來訪せられ共に喜悅に溢れ感謝會を開けり於是米代の不足金拾三圓九拾五錢八厘を支拂ふも尙ほ明日の米代として五圓三拾錢九厘を餘すに至れりあゝ天父の御惠は至れるかな

感謝會後結飯をこしらへ一同食に着くあゝ晨たに餓死を期して登山せし吾等夕には凡ての不足金を支拂ひ尙ほ明朝の糧をも備へらるゝを見ることを得たり共に食を斷て共に此惠を受けし者にあらずんは吾等が胸中に湛へ來れる此の感恩の情を知ると難し

○方今米國婦女子の大勢

ミース侯、カゼリン、セルデン女史其他の署名にて、去十月の北米評論雜誌に「方今の女子」と題する一篇の長文章を寄せて云く、

女子の郡部會議員

シカゴに於ける大博覽會の婦人館は、社會上政治上に於ける婦人の一大紀元なるべし。之に先だちて紀念すべき一事は、ロンドン郡部會の議員として、レディ、サンダルスト及びコブデン孃の二女史が撰ばれたることにて、其當撰の事につきては、法律上現に尙ほ彼此の異議あり乍ら、議員等は一同二女史の適任を認ため、男女合議の利を大ひに贊成し、近ごろ更に一女史マンス孃を撰擧してアルダーメンとはなしぬ。

共同飲食クラブ

女子の職工日に日に增して多く外に勞役すれど、下婢となりて人の家内に主婦につかわるゝことを嫌ふ風習漸次に高まり、下婢問題いよ〳〵切迫せり。よりて一策を案するに、（セルドン女史の說）こゝに俱樂部の共同料理屋をつくり、大凡そ三十戸ほどにて日々の食物を調理せしめ、此處にて飲食することとなさんは如何にと。左らば、一戸に一人づゝのクツク（料理番）を置くかわりに、三十戸の爲めに三四人のクツクにて足るべし。但し此組合餘りに多きに過れば、自づからホームの風をなくし、食物の味も人々の好みに應じがたかるべし。左れば、三十戸ぐらゐが適當ならんかと。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

米國婦女子の過學

紐育の衛生委員ドクトル、サイラス、エドソンは、亞米利加婦人の健康大ひに衰ろへたりと言ひ、其元因は、女子の學問の過ろに歸し、十才以上十七才迄での、勉學餘りに過度なるを論じ、三年前の統計表によりて、米人の出產統計著じるしく減じたるを示しぬ。

○日本婚姻法詳解

實用法政雜誌（發行所、京都斯聲館）第十五號に、法律學士古賀廉造氏の「日本婚姻法詳解」初版出づ。今日我國の婚姻法を論ずるに當ては、唯だ法理のみに照らして其是非を定むることを得ず、必ずや沿革に付て其得失を究めざるべからずと云ひ、遂に婚姻は、自然法より出る一の契約にして太古已でに其の契約たるべきことを知りしを見るべしと斷决したり。

○藤原氏の盛時

史海第二十九卷に、田口鼎軒氏が、藤原氏盛時の評傳あり。清少納言、紫式部、和泉式部、赤染衛門、大貳三位、小式部、伊勢大輔、江侍從等の女秀才輩（ぞうで）出の事にして、清少、紫女がひめの事も、舞台にあらわれ、當時の女のさま歷々として、かくさんようなし。

○日本男女兩性の比較

「亞細亞」第三卷第一號（十二月一日發兌）に、鈴木券太郎氏が起草にかゝる「日本の人口統計」と題する緻密なる一文章ありて、中に、右記載の一頃あり。歐洲各國に於て、獨り伊太利を除くの外は、何れも男子少く女子多きに、日本に多男少女なる因由は何事ぞとたづれて、第一、必らずしも女子を殺すにもあらずと辯じ、第二、女子が早世する故にもあらずと證し、第三、其要因と見ゆるは、男子が外に移住することの少なき故とし、最後に、私生兒の數に至りては、不思議にも、男兒少なく、女兒多しと注意したり。

○日本の結婚と離婚

鈴木氏は、前項につゞきて、右の題目にうつり、明治十九年以降二十三年に至る五年間に於て、日本全國の結婚と離婚との數を比較して、八と三との割合となし、即はち八人の結婚あれば、三人の離婚ありと示し。又た、此種の統計の不完備にして、調査にかたきことを歎かれたり。

○マグダーレンのマリアの墓

九月發兌の新聞評論（ノウベル、レビウ）に、アル バラー氏が記したるフローベンスのセント、バウムに巡歷したる紀行あり。マーゼールより程遠からぬ小さき奇しげなる都に、マグダーレンのマリアは、最後の三十年を送り、セント、バウムに葬られたりとは云ふ也。傳によれば、マグダーレンのマリアは、ラザロ、マルタ、二人ノマリア、チロームなど、小さき舟に打乘り、セントアンの死骸、セント、ヤコブの首などをまもり、王ヘロデの迫害を逃れて、ユダヤより此地に來りしなりと。左れど、此傳說には、もとより多くの異論もあることも也。

○日本美人の理想

カリフホーニア畵入雜誌の近號に、ヘレン、グレゴリー、フレッシヤー女史が、「日本の美人」と題する一篇をかゝげ、藝者容態、または其才ドりなどを記したる赤面の外なし。而して、西洋人が美の理想と、日本の理想と異なることを記して、彼の赤き髮の毛は、彼の邦にて嫌わる、其甚かきが、鬼の頭の毛を赤くするによりて知るべしとて、不平たらく〳〵の躰なり。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

いはひ歌

第六曲

しづ子

子供等は裏口から徐かに出升て、間もなく見へなくなり升た。

セイラは朗讀的に、口の中で「今夜は暖いとも暖かし直ぐ近いこつたから帽子は家へ置いて來升た今夜は暖かいとも暖かし直ぐ近いこつたから帽子は家へ置いて來升た」と延つに暗誦して居升たので、足元がお留守になり、幾度か滑つたり、躓いたりし升た。

ピータアは案内鈴を振つて音ない升と、軈て取次ぎが出て來て、一同を中へ招じたは好けれど、セイラに何か耳語して、勝手の方へ誘つて行升た。

他のラグルスの面々は總大將が戸を〆てあちらに行くを見ておびゆることと大方ならずて、一とかたまりになつて、協議もしよう存念でしたらうが、其暇さへ有ませんかつた。なぜといふに、二階から聲が有つて

　サア、直ぐとこちらへお上りなさいよ。

といひ升た。子供等は返事をするさへ、其譯を尋ねるさへ、其猶豫なく、たゞ言わるゝがまゝに二階へ昇り升て、エルフリダといふばあやに案内されて、臍の緒切つて始めて見たといふほど立派な坐敷へ通り升た。

嗚呼！これはまた何とせう！セイラ姉さんの影の見へぬうちに、ベードの奥さんが直と、

　みなさん、帽子は廊下へ置いて來升たか？

いひ升たが、これ等を運命といわずば、亦何をかそれと申しませうか。ピータアは、總領なり、是非口を利かねばなるまいと覺悟し、臆せて舌の自由ならぬスーザンが次に立つて居た方を情けなさそうに打見遣り、カス〳〵した聲で、

　けふは暖かいもんだから……………それだから…………アノ………

……

と辛うじていふた。あとをいひ得ず、口籠つて居る處を、スーザンが見兼ねて、イザと必死に奮發し、

ですから、見ばの好い帽子が頭數丈ないんです。

と思はず、いふ事共を口走り、ハツト氣付いてあとは恐ろしさに、凍つた物の如く、固くなり升た。

併し幸ひペード夫人は何氣なく、

本に、こんな近い處へ帽子は入りません事、わたしはウツカリしてたのですよ、サア、カロルさんの部屋へ直とおいでなさい、早く逢ひ度ツていつて居升たから。

丁度其時、セイラが裏梯から登つて來升た。實は密かに料理場を覗いて來たので、イソ〵〵して居り升た。ピイタアは悒〵しさに、捻つても遣り度く思ひ升た。さてカロルは悦ばし氣に一同を迎へて居る最中、セイラは一群の中をキヨロ〵しながら、

アレ、赤い？、ラレは？、ラレは來なかつたの？

オヤ、本に、ラレ！どうしたらう？

何でも一處に來たには相違ないのは、スーザンが靴磨の上を踏んだとて、叱つた記臆のあるによつても分り升た。ジヤクをぢさん抱腹して大笑らひをし升た。さうして、氣輕さうに、

本當に、おまへさんたちは始めから九人居たのか？

ピオリヤは、泣さうな顏をして、恥しげに、

たしか九人でしたツけ、でも、ラレは慥かに居たんです。

ジヤツクをぢさんは慰めて、

よし〵、安心しておいで、亡くなつたんじやない、どツかに置忘れてあるに相違ないから、僕が直ぐと行つて見付けて來て上よう。

セイラは其時、

旦那、あたしが行ませう、あたしが世話ァするとこだつたんですから。それに亡くなつたら、御馳走もおいしくは食べられませんから。

他の子供等は突立つたまんま、これが御馳走に來たのか、若しさうなら、振舞を悦ば敷との樣にいふのは何の譯かと、何れも苦敷思案をし、て居り升た。

セイラは「ラレや！」「ラレや！」と呼びつゝ下の廊下をヅット行き升と、間合もなく、心細さうなピヨ〵聲で、

こゝに居たよ！

答へが有升た。實はラレがセイラ姉さんの居なくなつたに付て他の兄姉たちを遣り過ごし、振舞といふ恐ろ敷ものゝ腮

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の中へ介添なしでは入る勇氣は迚もなくて、姉の來るを待つ積りで帽子掛の間へ竄り込み升た。いつまでも來ない處から、匿れ塲處から這ひ出して、誰かを呼ふとし升た時、けふは何たる不幸の重なる日か、傘やステッキに遮られて、一歩も先へ出ることが出來ませんかつた。鷄鳴らうとしても、それはおつかなし、幼な心によく／＼進退谷まつた時、セイラ姉の聲がし升たので、宛がら天人の音樂と聞升た。

ジャックをぢさんは其涙を拭ひ、二階へ連れて行升て、直き大口開いて笑らふ樣にもてなし升た。他の子供等もカロルの親敷扱ひに、一同が交際社會の利者の如くに話して居り升た。カロルの寐床は一番向ふの角へ引寄せて有つて、カロルは眞白なフワ／＼した樣な美事な部屋着を纒ふて、横になつて居り升た。金色の髮は色白な額と頸の上にフサ／＼と下り、頬は薄すら紅になりし眼は嬉さで艶／＼して居り升た。さうして子供たちは家へ歸つてから、カロルが、畫本の天人ほど美しかつたと話し升た。

此坐敷のあちらの角に大屛風が立廻して有つた、其後ろに絕へず、混雜が有つた樣子でしたが、五時半頃に、これを疊み去ると共に、立派な御馳走が立現われ升た。台處で松の木の飯台に向つて、なけなしの食物で間に合せることも有る貧兒等にとつては、實に驚ろく可き見ものでした。丈の高い五色の蠟燭の花やかさ、玻璃器や白銀の器の燦然かなる、生花の香敷、卓板の重みで反まで甘味を載せたるなど、總てがラグルスの面々の眼を眩ませ、お袋の氏素性も忘れさせ升て、彼等は思はず、聲を放つて、賞讃し升た。別してラレの擧動などは不躰裁でした。ラレはそれと見る中に、一列の中の我が席から跳び出し、自分のと知れた高い倚子に栗鼠の如くに攀ぢ登り、卓の上に自分の肥つた腕をかけて、大威勢に、

おれが一番に食つて、みんなァ負かして遣るから。

呼わり升た。カロルは此時涙の出るほど笑らひ升た。さうして席順を指圖して、

をぢさんはこゝへ、セイラさんは、其向ふへ、さうすると丁度双方四人づゝの席が殘り升から、

御馳走には七面鳥あり、鷄あり、それに附屬の詰物や汁や、五六種の野菜やら、芹やら、酢漬やら、また一々それを皿へ盛つた鹽梅は得もいわれず、ラグルスたちには一生の思出に

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

なり升た。それは新ら敷もの丶出る度に、是非カロルへ持つて行き度とて九人のうち誰か一人ヅ丶其役に當てられ升た。

東京案山子廼舍月並會

都時雨

○高との丶をす吹風に浮雲もさそはれいて丶時雨そめけむ
（さだめなき都のふり）

評。蛙は夏も鳴き時雨は秋もふれど各固有の時節即はち雅趣に基く時節あり、かくの如く冬といへども高どのには簾のかけたる處實際あるべし、されど長閑なる蛙の聲をきけば自然に春末の夕をおもひ、さためなき時雨といへば、忽まち初冬の空と感ずる如く、高どの丶をす吹く風と出かくれば、いさ丶涼しき夏の夕のけしき出くる也、而も下句は初冬の事をいへり、桂園翁のしらべにかなはぬとはか丶る處ならん、今添削にて下句全躰も力出でたるやう也。

都初冬

、小車にのりてや秋はいにつらん大路の霜にあとぞのこれる
（冬の立ぬ）（見えける）

評。あまりに才のはたけたるみうた也、あまり巧に他面より題意に打込まんとせり、而も却て意は漠然の心ちす、そはあさにはふたつの意あらん、一はしろしと見る時、一は通りたるあと也、此處後の心あらんも、霜は秋のものにて今は秋去り其霜がとけたるやうにもおもはる丶也、されど心むつかしければむしろ的面にあとをしるしに見てかく添削したる方解しやすかんか。現に角、下句、霜は秋のもの丶やう也、さならば秋のものが紅葉でも霜のうへにちり殘りてあらずば漠然たり。

、、此あさけあさりうる子が聲寒し大路に霜やおき初めにけむ

評。是は點者の知らざる景なるも必らず實景ならん、題意に好く適したるべし、彼古歌書の類題を參考して作爲する歌人の詠とは全く別也。

、かれはてし大路の柳霜みえて車のおとも寒き朝かな
（ちり）（今）

評。かく添削しても語格家は何とか非難すべし、されど語格者の旨に從ふ時は、何も景情を述る能はざる事となる也、よし述ても死歌となる此事に就ては點者他日著書中に論ずべし、されど枯果しにては枯木のやう也。

、御垣守衞士が吹くなる角笛にねさめ寒くも冬は來にけり

殘雁

かりかねはいつあさりけむけさ降し田面の雪に跡をのこして
（刈田）（ぞ）（れる）

評。雁は仲秋來り仲春北へ歸るもの殘雁は則ち春末頃迄殘るものならんか、そは冬は矢張雁は日本に居るものもあるべし、或は南洋に向ふものある故、殘雁といふべきか、現に角題は外にあるべし。

初冬月

もみちはもなかる丶水に浮びけりかれし梢の冬の夜の月

評。上下別々にて全首の趣意分らぬやう也。上句は水の面にいかにも美くしき紅葉の流る丶さまなれど、下句は夜にて空に月あるのみ、たとひ川に紅葉のながる丶とあらんも色は更也紅葉の形も見へざるべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○仁者敵なし

語に曰く、仁者敵なしと。世人此の語を掲げて金科となし、仁あるものには、總じて敵なしと斷ず。若し夫れ之を修德の覺悟となし、能く忍び久しく耐えて練達につとむとせば、或は可なり。然れども、此を規として人物を評し、古賢の價格を品定せんとするに至りては、太甚しき誤謬を生ぜんとす。抑そも、古來有仁の人多からずとせず、而も實際一敵をも作らざりしもの何處にありや。蓋し眞との大仁は大率ね當世に迫害せらる、終始人望を買ひ得たるもの、殆んとヿ在るヿなし。誰か、ユダヤのエスを仁者にあらずと云ふ、而も彼は遂に一世の敵を有したり。則はち門弟子を慰さめて曰く、人なんぢらを患難に付し、爾曹を殺すべし、又なんぢら我名の爲に万民に憎まれんと。仁者果して敵なしとせば、一世の敵を有したるベツレヘムの降誕子は、仁なきの人と云はずんばある可らず。故に、知る、仁者には、必らず敵あり。其の敵あるの多少は、則はち以て其仁の大小を度すべきヿを。一志を決し、熱誠を發し、顯乎理想を望見して、目前の小人情を打破するときは、習慣の保護者之に敵し、局促たる細義の徒之に敵し、短見薄信の俗士亦之に敵す、況んや其他をや。敵の多からんヿは、贊者の少なからんヿと共に確實也。

左れは、仁者無敵の語、誤まり乎。曰く、否な。此語誤なし、其解を以て謬れりとす。蓋し、仁者に敵なきヿを言ふにあらず、仁者には其敵とする所のものなきヿを言ふ也。大仁の見る所ろ一視すべて善、万事之が爲めに宜しからざるヿなし、愚人はあり、短者はあり、迷ふものはあり、誤まるものはあり、失策者はあり、病めるものはあり、僻するものはありといへども、皆ともに憫れむべく、皆ともに重んずべく、皆ともに盡すべし、亦何れを敵とし、何れを恨まん。こゝに於てか、仁者には敵なしとは言ふ也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外

●三女傑來遊せんとす。

万國婦人禁酒會々頭フランセス、ウイラード。同じく書記ゴルドン孃。英國婦人禁酒會々頭ソモルセット侯爵夫人の三女傑は、來春櫻花さかる比ろ、日本に來遊せんとす。

●入學者二百七十名。

過る九月開校の米國スミス大學は二百七十名の入校者ありたる由、女學不振の吾邦に於ては實に羨しき新聞なり、因にいふ、今年の入學者は昨年に比して五十名の增加、現今總數八百名餘、而して今年の入校試驗は殊の外嚴密なりしなりと。

●北國アイスランド便り。

同國に於ても追々女子の權理の重んぜらるゝに至り、近來種々重要の職務に女子の就くを許可するに及びたりと、

●イヂプト國カイロ府。

パリ大學醫科卒業生、メンデルソン孃、彼の地に行きて、開業したりしは二年以前のとなりしが、先頃同國王は孃を召して母公の病に侍せしむ。然るにドクトル、メンデルソンの施術甚だ其宜敷にかなひたりけん自今宮中の侍醫たらんとを命ぜられぬ。

●盲目者の新寫字法。

佛國アンヴェース孃の發明に起りし盲者新寫字法は大に諸新聞の注意を惹ぬ。其趣向は先づ尖鈍きペンにて青色の紙片に書する時は、下にあてたる吸收紙樣のもの 凸字を呈し、同時に青紙の上にも同文字を殘す趣構によし。

●米國に於る衣服改良。

長き腰袴に究屈なるコーセット共に不便にして、實業社會

に男子と競爭せんずる婦人に不相應なりとて、近來大に議論起りたるが、大博覽會に新工風輕便なる服裝の出品ありたる以來殊に此運動に贊成するもの多く、遂に委員を設けて右改良運動の事務に當り居る由、近着のウマンス、ワヤウチルに見ゆ。新形改良服は東國スリヤの女服を折衷したるものにして、從來袋樣の袴に代へて日本のタチツケ袴に似たる緩く膝下まで垂れたる物を用ゐるなり。塲末には勿論、都會にも右の改良服をつけたる婦人、橫乘りに代へて馬に跨りたるものチラホラ見ゆるやに聞ぬ。

●エレキを用ゐて鷄卵を孵化し焚木の代用とす。

博覽會開期中多くの眼を驚かしたる事柄中にエレキの即席料理を見物に振舞ひたると、親鳥の見へぬに雛鳥の即坐に孵化するにて有りき。エレキストウヴの用法は單にボタン樣の物を壓すに有りて、熱度は三百度、四百度、或は十分間、或ひは二十分間自在に發起、使用するを得る趣構にて、煙なく炎なく、熱の增減なく、十九世紀大發明の中にも最も奇異にして、魔法か手品かと只驚かるゝ計りなりと。

因にいふ、エレキストーヴ幷に鍋釜一式の代價一百弗なる由

●婦人に金牌を贈る。

先頃ヴィエナ府にて市會總代は一婦人に金牌を贈りたり、何が爲なりと尋ぬるに、孤兒を扶け、慈善事業に功勞淺からぬ故なりと言ふ。美事何ぞ之に勝らん。

時報

◎敎育

●鳥取市の女子敎育の事に付き京都府敎育雜誌記者の評言なりといふを聞くに左の如し

盧心鳥取市の狀態を見よ三十有餘萬石の城下として僅かに其名の知らるゝものは彼卑陋極まる因州因幡の鳥取云々の俗歌あるのみ豈に奮起せざるべけんや然して將來大に天下に鳴らんとする一美他に在り愛養慈育益々其發揚を計らざるを得んや試に同市五大尋常小學校を訪へ又高等小學校を觀よ女子の就學するもの甚だ多し吾天下を歷覽するに未だ同市の如き女子教育の盛なる所はあらず女子教育の盛なる遂に溢れて高等女學校と爲れり此れ鳥取市民が天下に向つて誇るべき一美狀なり云々（大日本教育新聞）

◎集會

●婦人手藝會　杉浦ノブ孃等の發起にて今度根室婦人手藝會なる者を設けたるよしなるが其規則書は左の通なりといふ

根室婦人手藝會規則

第一條　本會は婦人の知德養成の目的を以て組織し高等手藝を授く
第二條　會場未定
第三條　本會の主旨に基き每週一回婦人の知德養成に關する講話を授く
第四條　手藝は裁縫毛糸編物音樂の三科に分つ裁縫編物教授は每週十五時間音樂教授は每週四時間午後一時に始め四時に終る
但し音樂は當分の間オルガン、ヴハイオリン、琴の三種と假定す
第五條　大祭日日曜日を休業と定む
第六條　月謝は一科五拾錢但し日數割をなさず
第七條　望の者は住所姓名を記し束脩壹圓を添へ手藝會委員へ申込可し

手藝會委員　杉浦ノブ

（根室每日新聞）

◎風紀

●仙臺市の廢娼論　仙臺市在住の宗教家佐伯倉永兩氏の有志家は年來廢娼論を主張し縣會及縣廳等へ建言する處あり去廿三年の縣會は之を容れ三ヶ年を期し廢娼すると議決せしが本年は廿六年にして恰も三ヶ年目に當るを以て此際又縣會に向て運動し是非當初の目的を遂行せんとして勃興し同志を募り夫々運動の計畫中なりと云ふ（東北新聞）

●藝妓廓設置の請願　岐阜市北部復舊策の一として山本卯兵衛外數名より末廣町及び櫻町に藝妓廓設置の許可ありたしとて去る二十八日請願書を差出したりといふ忌まわしひ哉

●妙な議案　去る三十日の東京市部會に於て議員菅谷政勝氏は藝妓の稅が現今一圓小藝妓五十錢といふを改ためて一倍增にせんと述べ又同日同會に於て議員松山秀雄は貸座敷の賦金が現今一つにつき十五錢といふを十三錢に引き下げんとの說を持ち出だせしも贊成者少なくして共に廢案となりしといふ

◎片々

●東京府の結婚と離婚　に就て去る二十九日「日本」紙上に一閑人の投書なりとて掲げたるものあり、見るべきものあれば此に轉載す

東京市十五區に於ける本年十月中結婚離婚の屆出數及同年齡別は社會學及醫學の研究者には面白き考察の材料なるべし此表に由れは結婚五百九十一離婚百六十二にして離婚の割合に多きは何時もながら驚嘆の至に堪へざるも其れは無謀なる結婚の結果として暫く擱き次きに結婚者の年齡を調査するに廿歲以上三十歲未滿の男子にして十五歲以上二十歲未滿の女子と婚したる者百十四、又た同年の男子にして二十歲以上三十歲以下の女子と婚したる者百七十三、三十歲以上四十歲未滿の男子にして二十歲以上三十歲未滿の女子と婚したるもの百二十二あり此三者を合計すれば四百零九人にして殆んど全數の三分二を占む之に由りて之を觀れば東京十五區民の結婚は男二十歲以上四十歲未滿、女十五歲以上三十歲未滿の間に行はるゝを知るに足るべし過般ポール、モール、ガセット新聞に初婚男子一千人に付き其年齡を類別して左の一表を作りたるものあり

年齡	每千人に付結婚數
二〇：二五	二一
同　二五：三〇	九四
同　三〇：三五	一三八
同　三五：四〇	一四七
同　四〇：四五	一二二
同　四五：五〇	七九
年齡	每千人に付結婚數
五〇：五五	四三
同　五五：六〇	三四
同　六〇：六五	一九
同　六五：七〇	五
同　七〇：七五	三
同　七五：八〇	二

彼れと我れとを較すれは東京男子は英國人よりも早婚なるを證すべきなり佛蘭西の學者パルテヨンと云へる人は曾つて婚姻と壽命との關係を論し死亡者の割合は未婚者に多くして旣婚者に少く癲狂者及び犯罪者の數も亦未婚に多しと說きたるも東京市民は早婚の爲め果して死亡者の割合を減したるや否やは未た詳かならず唯た東京市民に付きて最も不思議に感するは四十歲以上五十歲以下の男女にして離婚するものゝ割合は其結婚數より大なることと是より即ち此年齡に於て結婚したるもの一二、離婚したるもの一七あり其他の離婚者割合も亦年齡の增加と共もに增加するものゝ如し是れ甚た奇と云ふべし英國などにては四十五歲以上の男子にして再婚するもの至りて多き由にて其割合は左の如くなりと聞けり

年齡	結婚數
四五：五〇	一一〇
五〇：五五	九三
五五：六〇	七五
六〇：六五	五七
六五：七〇	三六
七〇：七五	一八
七五：八〇	五

此表に付きて或人の如きは一旦結婚したるものゝ再婚を求むるは未婚者の求婚するよりも急切なりと解したるも思ふに是れ人情を解せざるの論なり年長にて再婚するものは大抵其初婚の妻に先たれて子女の厄介に從事するものなきを以て止むを得す其相續者を求むるものならん去るにても東京市民の年長者中離婚の數却りて結婚の數に超過するは如何社會學者の考說を承りたきものなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

櫻井明石君譯

希臘孝子腓立比(ピリッピ)物語

大形洋綴美製
正價金卅五錢
郵稅　金六錢

今を距ると六十年希臘國の勇士等、土耳其國の厭制に堪へず義兵を擧げたりし時、一方の將となりたる、メサロスなるもの戰敗れて、其妻と共に奴隷に賣られて、遠くアラビヤのバグダッドへ連れ行れて、苦役に服しをり、其子腓立比其時六才なりしが、或人に養育せられて十七才に至りたる時、土國より遣はされたる管領の危難を救ひしが緣となり、管領腓立比の至孝勇猛を感じて莫大の金を與へ、船を用意させて兩親を贖ひに出しやり、船中にて腓立比は船長の危難を二度助け又船長の助言により腓立比基督の信徒の身を以て、土國マホメット宗徒の假裝を爲して、單身にて隊商の群に加はり愈アラビヤの沙漠に乘り込み、沙漠中にて其基督敎徒なると露見し殆ど生命も危かりしを、隊商の頭領其至孝と堅信とに感じて、大に腓立比を省みるに至り、後又隊商等がアラビヤのベドウイン族に剽掠せられ囚虜となりし時、腓立比も、亦囚人となり、爾後幾多の艱難變遷ありて、終に酋長腓立比の志に感じアラビヤの健兒に護送させてバグダッドへゆるし遣り、バグダッドにて非常の困難に遇ひ大失望したりしも、圖らぬ助けを得て遂に兩親を奴隷苦役の中より十二年目に芽出度救ひ出しぬ。

朝野新聞の評　櫻井明石氏重譯　希臘孝子腓立比物語

是れ記者が三年の歲月を閱みして經營慘憺の閒に成れるもの宜なり卷中の人物躍如として其の眞を顯はし一讀の下人をして感慣激勵嗚咽の情に堪へざらしむるや、飜りて想ふ我れの國を建つる茲に三千年其の間忠臣あり義士あり烈婦あり貞女あり善く世道の澆季を拒きしや今や人心維れ危く道心維れ微なり想ふて茲に至れば余輩豈に感慨なきを得んや」女學雜誌社主は道德卓行の士なり。溜々たる天下輕薄是れ追ふの時に於て彼れは獨り万斗の熱涙を灑いて世の信仰ある德義あるの士女に同情を表せり而して今此孝子の蹟を梓して世に行はんとす彼れの意を用ゆる深しと云ふべし

發賣所　東京神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生編述
增補訂正 第五版
皇后宮御覽

はゝのつとめ

親の巻 妊婦産婦の心得 定價金三十錢(郵税二錢)
子の巻 育兒法 定價金四十錢(郵税四錢)

右は我國無双完全無比なりとの好評を博したる日本子母衞生書なり、華族女學校醫科大家産科婦人小兒科病室並に群馬縣高等小學其他の諸學校に於て參考書として用ゐらる。文章は談話體總平假名付にして極めて理解し易し。婦人方への贈物として最上の好品なり

近藤嘉三先生著諸大家序文

言語作法 貴女の心得

全一冊 賣價十四錢 郵税四錢

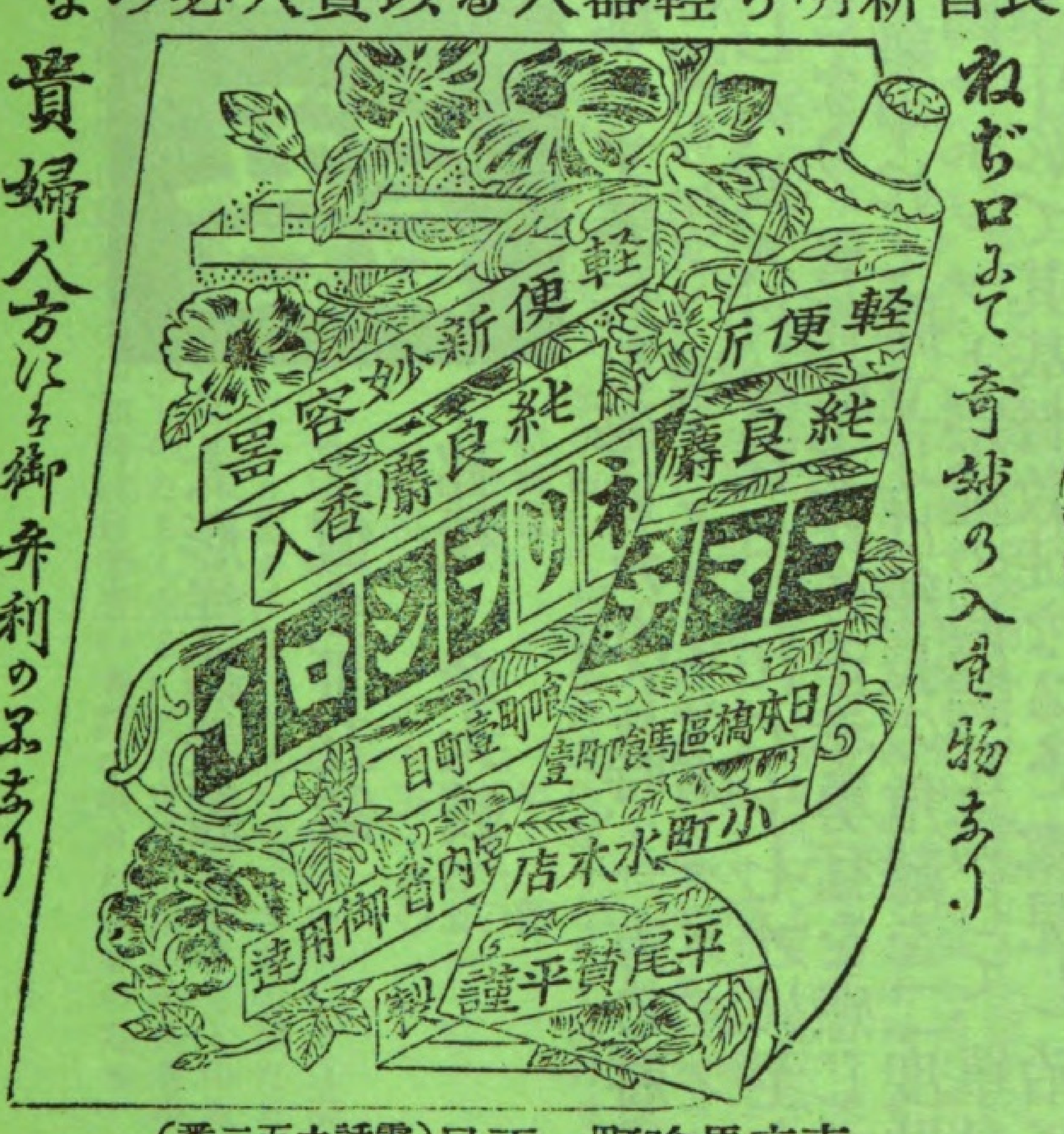
表紙石版美本菊版大形圖畫六十餘挿入

本書略目次は淑女の心得夫人の心得化粧の要訣談話の心得訪問の心得賓客接遇の心得室內粧飾法和歌の書方香道の心得茶道の心得新式和洋挿花法家庭衞生法等其他數科にして一々圖畫を以て之を平易に說明し其數科の內一科を心得るも有益の書なり所謂貴女の位置眞價を進んとする婦女諸君本書を一讀せられなは本書は實に夫人の敎師として淑女の朋友として而かも眞成に多識多藝なる眞師眞友を得たると同し價値を有し眞の貴女たるを得ん

發賣所 女學雜誌社書店

御おしろいたし元祖

純眞麝香入新發明ねぢ口輕便器物入なるを以て貴婦人に必要の品なり



東京馬喰町一丁目(電話六五二番)
有名賣藥化粧品類問屋宮內省御用達
岳陽堂 平尾賛平

皇后陛下
明宮殿下
御覽濟の書

クリスマスの贈物

巖本善治妻譯

再版

（リツトル。ロード。フホントルロイ）

小公子

小供のよみ本

發賣所

森田思軒居士の批評

（前略）又た若松賤子を得たり「小公子」の若きは小生竊かに推して廿年來第一の譯となす唯一と云ふに非ず第一の等列に在るべきを云ふなり「雛嫁」は驟かに之を看れば少しく「小公子」に遜るに仍たり然れども之を邦語に移すに當りて「フホントロイ」と「カパフヒールド」とは其事其文兩ながら難易甚だ同しからず遽かに軒輊す可からざるなり。（早稻田文學第二拾三號）

（批評）〇十一月十五日讀賣新聞〇經濟雜誌五百九拾八號〇巖谷季雄君〇十一月十三日報知新聞〇十一月十七日中央新聞〇早稻田文學四號〇國民の友百三十八號〇十一月廿六日國民新聞〇十一月十七日中正日報〇亞細亞廿二號〇護敎廿二號〇下田歌子君〇中島俊子君〇石橋忍月君〇一月十六日自由新聞。

定價金二十八錢
郵稅金八錢

東京市神田區表神保町六番地
女學雜誌社書店

クリスマスの贈物

は面白き勸懲繪草紙にして第一小供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土産遺物としては無類のものに候

定價一冊五錢
郵送料二錢

其他

木村鐙子之傳　全一冊　正價金八錢　郵稅金貳錢
子供のはなし　全一冊　正價金五錢　郵稅金二錢
西洋女禮　全一冊　正價金拾錢　郵稅金二錢
看護婦美談　全一冊　正價金二十五錢　郵稅金六錢
家政要旨　全一冊　正價金五錢　郵稅金二錢
淺瀬の波　全一冊　正價金三拾錢　郵稅金四錢
蓬萊曲　全一冊　正價金八錢　郵稅金二錢

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驚くべき日本の大發明

●りうまちす病新藥發見　病理學の進歩に從ひ屢新藥の發明あるは我々人民貴重の生命をして長壽健躰に安居せしむる實に喜び限りなき聖代

りうまちす病新藥其藥劑原品は墨西其國より輸入する藥劑にして發明者は有名なる大醫陸軍々醫總監林紀先生にして此藥劑を配合したる丸劑は僂麻質斯病を根治全快せしむる耳ならず瘡毒かつけ病等も忽ち全快せしむ發明以來此藥劑を用ひて全快せし患者五萬人以上に達したり　岡田商店

りうまちす瘡毒かつけ參病は皆長病であります又難病でありますが、此發明新藥は一二年位の輕症患者は半劑九日分にして全快す、五六年は一劑十六日分十年以上は二劑服すれば必らず全快す

此新藥は根治療法にして後患なき發明藥ゆへ殊に外國人の賞用する藥により外人居留地に販賣店あり海外輸出店は朝鮮國京城泥甘號山口商店なり

藥名は克快丸といふ此發明新藥を購求しりうまちす瘡毒かつけの長病を根治全快せしめんとせば藥價の外送達料二錢を添へ郵便小爲替にて　岡田商店報

東京市淺草區なみ木町大通り東側順天堂藥房岡田支店と認め御注文あらば急送す

半劑金三十錢　壹劑金五十錢　貳劑箱入金壹圓之

日本の美婦人

克快丸商店報

●海軍大軍醫石神六郎先生の發明せられたる**天賞湯**は婦人ちの道子宮病に用ひまして其根本たる病源を治し身躰をあたゝめちのめぐりをよくし子宮病其他婦人病を全治するは此新藥天賞湯に限る又産前産後に又月やく不順に皆服用して全治せざるなし　ナヲリ膏と云ふきず藥あります

麻袋七服入全國一般送料共金三十四錢

東京市淺草區なみ木町大通り東側

發明本店　順天堂藥房　**岡田支店**

關西特約　大坂市北區坪屋町二丁目九十六番地邸　克快丸準支店　**津川音五郎**

克快丸取次賣弘所之部

東京市畧表

兩國村松町特約	岩涙長藏
同廣小路米澤町	大木口哲
日本橋區上槇町	安川榮次郎
同小網町四丁目	百草軒藥林
同代三町ふとや	島田理兵衞
同瀨戸物町同	玉置金八
本石町二丁目	森谷萬治郎
同大傳馬町二街	岩涙出店
同馬喰町一丁目	平尾贊平
同同二丁目	岩涙支店
同元大坂町	高木清婦湯
下谷池之端寶丹	守田治兵衞
京橋銀座一丁目	佐々木商店
同銀座二丁目	岸田精錡水
同三丁目萬金丹	松澤八衞門
牛込築土八幡町	尾澤巨助
四ッ谷傳馬町角	永田義原
神田仲町記臆丸	山崎帝國堂
辨慶橋東福田町	ふいごや
本郷五丁目山田屋	高島文藏
淺草菊屋橋角	山田清兵衞

横濵市畧表

野毛町三丁目	栗原清八郎
同二丁目	杉浦藥舖
伊勢崎町二丁目	西海喜兵衞
同一丁目ひろ屋	櫻井久三郎
賑町一丁目	里見松泉堂
戸部町五丁目	室屋德藏
同一丁目上野屋	細野藤衞門
長者町六丁目	藤田孫七
元町二丁目藥舖	中村德次郎
同一丁目栗原屋	柿沼忠之助
同代官坂下角	竹生福太郎
同五丁目二天堂	田澤又衞門
石川仲町地藏坂	小林信治郎
石川町六丁目	田中熊治郎
同仲町六丁目	中井兼一郎
北方千代崎町	岡田誠之進

諸國の部畧表

肥前濵崎橋口町	廣川常太郎
備後尾の道中濵	佐藤政兵衞
岩代飯坂町湯澤	白田養壽堂
北海道圓山村	伊東礒八
同苗穂村五番地	鈴村馬助
上總東金北幸谷	高山音次郎
遠江國掛塚港	加藤太一郎
野州栃木河合町	叶屋利平
豐後國臼杵町	本多妙藥堂
前橋市細ヶ澤町	西村兼治郎
武州秩父大宮町	永井安之助
上州高崎連雀町	鈴木彦三郎
上總木更津貝淵	小倉源藏
名古屋建忠寺前	佐藤市五郎
駿州沼津町大門	長倉範吾
陸前氣仙郡盛町	千葉市治
仙臺市大町三	慈善堂
尾州熱田はたや	栗田善次郎
下總海上郡旭町	近江屋吉藏
陸前石之巻横町	菊屋善次
弘前土手町	野崎藥店
陸中鍬ヶ崎上町	堀田文七
岩代須賀川東十	吉川淺吉
盛岡市紺屋町三	大島常次郎
甲府市泉町	父母の屋金藏
甲府市常盤町	內藤賣藥部
函館辨天町	國領平七
信州松本大橋詰	增田武壽計
同上諏訪上町	宮坂金三郎
同小諸市町	藪原勇
北佐久郡鹽名田	望月喜之助
淺間溫泉本郷村	手塚七太郎
南安曇郡穗高町	山屋浦吉
北佐久郡中佐都	荻原仙助
羽後酒田下內町	佐藤立志堂
同飽海郡市條村	阿部仁衞門
羽前東田川下山添	阿部德惠
上州太田町賀店	成田定三郎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文學界

第拾壹號目次

哀縁　もせい
ゲーテが小河の歌を讀む　秋骨
猩々舞　蓮花庵主
露のいのち　蟬羽
硯友社　無名氏
山の井勾當　花圃
酒匂川　孤蝶
ねざめごと　破蓮坊
時文。
秋風一葉。今日この頃。チルヅチルス。男ごゝろ、こぼれ萩。文學叢書。不知庵、三昧。

定價

東京市内		市外
一冊	六錢	六錢五厘
六冊	卅三錢	三十六錢
十二冊	六十錢	六十六錢
		郵税

發行所
東京市神田區表神保町六番地
文學界雜誌社

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第五版 百人一首講義

正價金廿八錢
郵税四錢

御高評を得たる百人一首第四版品切に成りたれば玆に第五版印刷中本月中旬より發賣仕候間御注文奉願上候

發賣所
東京市神田區表神保町六番地
女學雜誌社書店

益田克德君譯述
若林玵藏君速記

夜と朝

全一冊
正價金廿五錢
郵税金六錢

此書は英國希世の人傑「ロールド、リツトン」氏の傑作「ナイト、エンド、モーニング」を益田克德氏の口譯し、若林玵藏氏の筆述せられたるものなり、原書の價値は世已に定評あり、今その慘澹奇抜の結構を、益田氏が流麗巧妙なる語勢を以て説出し老練なる若林氏の筆寫せるもの、一の泛辭なく、一の虛語なし、自ら至妙の文章をなす、世に有ふれたる筆記躰と遙にその趣を異にせり、森田思軒氏此書を以て我邦文學世界に一變を生するの兆朕となす誠に宜なり

賣捌所
東京神田區表神保町六番地
女學雜誌社書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治二十六年十二月二日發兌

隔週發行 評論

第拾八號要目

史傳　俳聖芭蕉（十五頁長文完結）小此木竹文、布川靜淵同稿

講壇　記者難（方今得意の文士に警告す）好惡は性情を明す、世人何故に基督敎を嫌ふ乎

文學評論　偉大の觀念（眠叟子）

時事　老俠子の爲に泣く。文相は寧ろ鷹揚なり。紅葉、地に落つ。無責任の人物評。近衛公の華族論。憐韓と條約改正。禁酒、矯風、地方人士の氣慨福音の聲再ひ高し、日本人の自給團結の傳道事業。內閣の政畧議案。

書架　社會的經綸策◎ヤンキー◎最暗黑の東京●敎育會汚濁の源、其澄淸○籐榮木枯○しがらみ草紙○庚寅新誌○哲學雜誌○心海○○統計集誌、統計學雜誌○東北文學

雜錄　市府敎會（下）市府敎會の社會に對する任務（續）（三）靑年（四）壯年○民たる壯年○勞働者たる壯年○罹病の壯年○工塲の壯年○閑暇の壯年○事業の壯年○無職の壯年○在宿の壯年○死の壯年○雜○附錄

海外風信　今日の伊太利○自營の童男女○獨逸の社會黨○英蘭銀行の紙幣○英國の兵士○ビスマーク公鬚髯を貯へんとす○佛國の訃音○米國の宗敎統計○シヤツフ氏逝く

徒然草　紅葉と言ふ（しのぶ）。

本誌代價			
一册	金六錢	郵税	金五厘
六册	前金 三十五錢	市外	三十八錢
十三册（半年）	同 七十三錢	同	七十八錢
廿六册（一年）	同 一圓三十錢	同	一圓四十三錢

發賣所　東京神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

女學雜誌定價表

一册數	定價前金	市外定價郵稅共
一册	金六錢	金六錢五厘
六册	金三十五錢	金三十八錢
十三册（半ヶ年分）	金七十三錢	金七十八錢
廿六册（一ヶ年分）	金一圓三十錢	金一圓四十三錢

一本誌購讀者は代價郵稅共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

一本誌代價郵稅共郵便小爲替にて拂渡局を必らす

一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事。

請取人は神田表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。郵便切手代用は一割增（五厘切手に限る）にて申受け候。

一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何册分と詳細に御書添への事。

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日內務省許可
明治廿六年十二月八日印刷
明治廿六年十二月九日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　仝　牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京北豐島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社
印刷所　仝　牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍工塲（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY